エドウィン・スミス・パピルスにおける語中改行

The Split Spellings in the Edwin Smith Papyrus

塚本 明 廣^{*}
TSUKAMOTO Akihiro

ABSTRACT The words bridging the two lines in the Edwin Smith papyrus are not split arbitrarily. They do, however, follow several rules:

(1) More than one consecutive determinatives are never divided into two lines. The combinations are treated as inseparable single strings. And the determinatives, single or combined, have a tendency to shift to the head of the next line.

(2) The grammatical morphs (xr, jn, n) are never separated from pronominal suffixes. The combined string forms an indivisible unit. And they are placed at the head of the next line.

(3) The grammatical morphs (xr, jn) written alphabetically are never split, while lexical morphs spelled phonetically can be split freely.

These restrictions and other tendencies of spelling are tested and confirmed by other literary works in hieratic script with limited exceptions.

Considering these split words and words written within lines, and the fact that determinatives of lexemes vary freely, ancient Egyptian scribes must have already identified linguistic units. These correspond nearly to words, grammatical morphemes, and determinatives in contrast to phonograms in modern linguists' terminology.

エドウィン・スミス・パピルス⁽¹⁾第8欄6行目から7行目(以下、用例の出現欄と行を8, 6/7等と略記)にかけて s3 という単語が現れる。ガーディナーのコードに従うと {s3} ! {Z01} と翻字⁽²⁾されるこの単語は、奇妙なことに、縦線

* 佐賀大学教養部助教授

Associate Professor, College of Liberal Arts, Saga University

{Z01} のみが次行行頭に先送りされている。この単語は、12, 22 (欄末) /13, 1 (次欄冒頭) にかけて統辞論的に全く同じ環境 (Hr s3 n pSn pf) で現れ、そこでは語中で分断されることなく表記される。そのことを見ても、第8欄のこの縦線の先送りは、理解し難い綴り方という印象を免れ難い。同欄の行末 (8, 22) に現れる Hsb の縦線の扱いを初め、本パピルスで縦線が行末にかけて現れる他の用例を総覧すると、この印象は一層強められることになる。即ち、問題の s3 唯1例を除く23例において、語末の縦線は行内に収められているのである。⁽³⁾

本文を一貫して横書きで通したスミス・パピルスの書記が、左行端を揃えるために縦線を行内に収めたり次行送りにしたりした訳ではなかったこと、換言すれば、行末に多少の出入りが生じても書記の関知するところではなかったことは、パピルスの適当な1欄を眺めれば一目瞭然である。それどころか、欄頭から欄末まで行頭を縦一直線に揃えた欄は、全22欄中表側が第6, 8, 10, 12, 13欄を、裏側が第18欄を指摘できる程度に過ぎず、パピルス全体からするとむしろ少数である。第11, 19, 21欄 (の「呪文」の部分) に関しては、他の諸欄と比べると字数が少く行が短いが、各欄における行の長短と単語半ばでの改行の多寡には直接的関係は見られない。また、エジプト文字においては審美的理由から文字の位置の転倒その他があることも知られているが、ここはその種の例に当らず、かえって書記の審美眼を疑わせる表記である。

結局、8, 6/7 で縦線を前行内に収められない積極的理由は見出せない。書記は単語としての認識とは無関係に、意味のまとまりを無視して、ただ機械的に書き記しただけであろうか。単語という概念は近代の言語学者の発明であって、古代人には無縁の抽象概念だったのでであろうか。再び縦線 {Z01} の用例を眺めると、それもまた極論に思われる。書記に単語としての認識があったからこそ、他の23例においては縦線を同一行内に収めたのでであろう。何よりも、単語の切れ目と行の切れ目が一致する 352 例にも上る用例が、明確な単語認識の存在を証明してはいないだろうか。また、限定符の様々な用法にも既に高度の言語認識を有していたことが明かである。⁽⁴⁾

では、問題の用例は例外的表記として簡単に片づけられる性質のものであろうか。{Z01} と翻字されるこの文字は、実際はかなり太い縦線であり、書き手の意識に充分捕捉された筈である。したがって、単なる誤記とは片づけにくい。

何よりも、誤記と認めることは、とりもなおさず原則の存在を前提することになる。一体、改行に関わる分綴法なるものがあったのであろうか。そのことを積極的に確かめるためには、語中で改行された用例全体を検討しなければならない。

同じく例外的と見なせる表記に、18,15/16の pr.f がある。この表記 [pr] r {D54} ! f と行内に収める諸例とを比較せよ。⁽⁵⁾ 人称接尾辞を行内に書収めるそのような表記は、全部で103例、その中で pr.f と同様に限定符と人称接尾辞を持つ用例は55例あり、圧倒的な用例数から推して、[pr] r {D 54} ! f のように語尾の f のみを次行に送るのが例外的であることは、ひとまず認められる。ところが、これに 18,19/19,1 の v [D3] 3 {Y01} !!! k v {j} =wD3. kwj や 21,12/13 の x r ! t w =xr. tw を追加すると、これらを全く偶然の表記と断じることが躊躇される。なぜなら、この3例は人称語尾という共通の文法形式を伴う単語だからである。このような共通性は、改行の際に古代エジプトの書記には全く意識されなかったのであろうか。用例数3例というのは確かに僅少である。意味上の共通点は偶然に過ぎないかもしれない。しかし見方を変えたと、そのような共通特性を持つ用例が極端に少ないとも言えるのである。換言すれば、このような用例数の偏りから推して、人称接尾辞のみを次行送りすることは極力避けられたとは言えないであろうか。このことの確認のためにも、2行に跨って表記された単語の詳細な検討が必要となる。

I. エドウィン・スミス・パピルスにおける分綴法

以上のような理由から、行間を跨ぐ単語、即ち単語半ばで行末に掛かり、単語の後半を次行行頭に送って表記せざるを得ない場合に古代エジプトの書記が取った方策を一括して考察する。勿論、語末と行末が一致するつまり行内に収まる用例は352例あるのに対し、語中改行の用例は、復元箇所を除いて109例（「外科症例」の部分92例、「呪文」の部分7例、「内科的処方」の部分10例）と、数量的には前者の方が遙かに多いのであるから、単なる数値の比較は実態を眩ます恐れがある。以下の考察に際しては、あくまでも改行を余儀なくされた場合が問題の焦点であることを忘れてはならない。でなければ、全てを偶然の仕業として片づけることもできるからである。逆に、単なる偶然に過大な読込みをしないような用心も必要である。そのため、孤例に基づく推論は極力避ける

べきであろう。行内に収まる形式を比較資料として参照するのは、そのような一般化の行過ぎを避ける必要からである。要するに、用例数が偏る場合や余りにも異例と思われる表記に対してはそれ相応の理由があったと考えた方が良く、というのが本稿の立場である。8, 6/7に見られる改行もその一例ではないか、とするとそこで改行する理由があった筈だ、と筆者は考えるのである。

説明の便宜上、ここでエジプト語の単語構造を概略的に示すと、語彙の形態素＋語幹形成形態素＋人称接尾辞となり、表記上は語彙の形態素の後に限定符が入ることが多いけれども、語幹形成の文法的形態素の後に限定符が表記される場合も少数ながらある。⁽⁶⁾以下の議論においては、大多数は3子音からなる語彙の形態素をL、限定符をD、語幹形成の文法的形態素をM、人称接尾辞をPと略記する。したがって、公式風に表記すると、L DMPとなる。DMPは随意使用されるので、その何れかまたは全部を欠くこともある。ちなみに、本パピルスの神官書体はほぼ1文字ずつ書分けられていて連字が少ないのが特徴である。以下の諸例においても特に連字と関連づけた説明の必要性は感じなかった。⁽⁷⁾

語頭から順に検討していく。語頭からの字数を数えてみると、語頭から2字目以降を次行に送るのが28例、3字目以降が31例、4字目以降が34例、5字・6字目以降が16例となり、最後の、絶対数としても語数の少ないやや長めの単語の場合を別にすると、用例数には殆ど差がない。つまり、何字目以降を次行送りにするといった意味での用例の片寄り、言換えると分綴法は見られない。念のため、次行送りにされた文字数を基準に分類しても同様の結論に導かれ、⁽⁸⁾字数に基づく改行規則があったとは思えない。音節の切れ目で改行された可能性も次のような用例が否定する：5, 11/12 : v ! d {Z09}. x r. k と 5, 12/13 : v d {Z09} ! x r k ; 13, 14/15 : q 3 ! b t {F51}. f と 13, 18/19 : q 3 b ! t {F51}. f。

とは言え、再度資料を眺めると、改行法に類するものは全然存在しなかったという印象が怪しくなる。と言うのは、語中改行により次行送りされた文字は、Lの部分を担当する表音文字が大多数を占めるからである。Lの一部、または全部が表記された後（つまりDの直前でもある）の改行は、全109例中、実に99例を占める。表語文字の用例が数例あるけれども、これもその単語のLを担当する部分であることに変わりはない。ところが、全109例の殆どを占める、Dを持つ

形式94例についてみると、単語の意味を暗示するに留る部分つまりDの表記直後に改行した単語はのべ語数で僅か10例しかない。⁽¹⁰⁾語末がDで終る単語で行内に収まる用例が114例もあるのに較べ、いかにも偏った数値である。しかも、その10例中8例がM(xr, jn, n)を持ち、残る2例もP(f, kwj)を有する形式である。上述のpr.fはその2例中に含まれる。逆に、改行直後にDが現れる例つまりD以下を次行行頭に書送る(Lの直後の改行とも言える)用例は37例、⁽¹¹⁾その中でMを持つ用例は僅か2例に留まる。このように、用例に何らかの傾向性が観察される以上は、表記の偶然や書記の恣意だけで片づけることはできないと思われる。そして、それに対する注意を喚起するのが、本稿の考察のそもそもの発端であった。これまでの観察に基づくと、どうやらD以降に改行の際の制約がありそうである。

上で検討したとおり、語中改行の用例でDを持つ単語全94例中、Dの直後に改行するものが10例であるのに対し、次行行頭にDが先送りされる用例は37例である(残り50例近くはLの途中で改行されている)。Dは改行直前よりも改行直後に現れる傾向がやや強いと言える。しかし、LD型つまりMやPを欠く単語の内、行間を跨ぐ用例は52例(この中にはL内部で改行し、必ずしも改行直後にDが現れない用例も含む)であるのに対し、Dを当該行内に収めてしまう用例はその倍以上の122例もあり、用例数としては後者が遙かに多い。したがって、Dそのものは改行処理に際して改行の前後何れであっても良かった、つまり制約はなかったように見える。と共に、D以降を次行に送る分綴法は、極く一般的に行われていたとも言える。しかし、ここにMが関与してくると、数値に幾らか偏りが現れる。DMという連続が改行により分離される傾向が強くなる現象である。もっとも、それを支持する用例は7例、否定する用例が2例となれば、⁽¹²⁾拮抗しているとも言える。これについては、下記を参照。

ところが、連続する2字以上のDを持つ単語の場合、行内に収まる60例近くの用例は無論のこと、語中改行の27例を加えても、DDが改行前後に分けて書かれた例は、⁽¹³⁾皆無である。つまり、2字以上のDDは一組の単位体として処理された、と言える。さらに、語中改行の用例中、DDが2字とも次行行頭に送られたものは13例あるのに対し、2字とも前行に収めるのは僅か1例(20, 18 : s j [jn] n {Aa02} {D 36} !!! x r k=sjn.xr.k)に過ぎない。残りはL内で改行されている。しかもこの唯一の例外も、見方を変えれば、孤例どころか、

DMは改行で分けるという、前節で見た別の一般的傾向に従った表記と見なし得る。これにさらに、Dが1字の場合も加えると、D以降の次行送りは上述のとおり37例となり、語中改行の場合に限ると、Dは次行に先送りする方が好まれた、と言えそうである。すると、本稿冒頭に述べた 8,6/7 の {s3} ! {Z01} もこの集団に属するとは考えられないだろうか。この縦線 {Z01} がDを意図したものなら、行頭の縦線つまりDの次行行頭送りは何ら奇異な綴ではなく、かえって一般的傾向を反映した綴ということになる。

M (xr, jn, n) を持つ形式は、語中改行の用例に18例、語中改行のない用例に13例、合計31例が例証される。⁽¹⁴⁾ その内Dを持つ形式は、語中改行の用例中15例に上るけれども、DMという二因子と改行との間に明確な関係を読み取り難いことは、前述した。ところが、Mを持つ用例は、2例を除き、MにPが付属する形式である。そして語中改行の内、xr の7例、jn の2例、n の1例、計10例でMが改行直後に現れ、残りはL内での改行が6例、前述の改行直後のDの出現が2例である。Mが改行直前に出現する例は、両者合わせた31例中に1例しかない。しかも、その場合の主語は代名詞ではなく名詞である (3,7/8 : [wn] n {O31} {D36} x r ! {r3} {Z01} f=wn.xr r3.f「彼の口が開く」)。したがってMPが分断される用例は皆無、つまり、MPの結合形式を行内に収められない場合は分割せずに一組として扱い次行に送るという原則を認めることができる。ここで上述の s j [jn] n {Aa02} {D36} !!! x r k を見直すと、前項のDDを次行送りにする原則からは外れるが、この原則には適っている。換言すると、「MPは次行行頭に送る」という原則が「DDは次行行頭に送る」という原則に優先したということである。MPを行内に収める12例は、一見すると本節の原則を疑問視させる用例に見える。しかし、[mj] ! j, t [tm] ! m, [pr] r {D51} ! f 等の17例⁽¹⁵⁾に明かなとおり、1字のみ次行に送ることもできた筈である。にも拘らず行内に収めたのは、MPという結合においてはMとPの間で改行できない理由があったからではないだろうか。この結合のPは全て1字の形式で占められているので、⁽¹⁶⁾余白不足は改行の障害とならなかったことも理由の一つであろうが、これについては後述も見よ。因みに、tj もここに入れるべきかも知れない。[Ss] z m ! [tj] j=Ssm.tj (7,19/20) の用例から、tj がこのようなMの一つと意識されていた可能性があるからである。ただし、同じ形式を行内に収める例 (7,23) もある上、tj の用例数が少な

いのははっきりしたことは言えない。

結局、以上から明かなように、本パピルスにおいてMを有する形式が行末または行頭に掛かる場合、ほとんどの用例でPを伴う（31例中29例）。このMPの結合自体は恐らく偶然の結果であろう。これに対し、次の点は偶然の結果とは思えない。即ち、単語全体を行内に収める12例の場合は当然のこととして、語中改行の17例の場合にも、この二つの形態素MとPは一組の単位体として処理されているのである。換言すると、MとPとが改行によって分断されることはなかった。さらに、xr, jn 等2字構成のMそのものが切断される例も皆無である。これは、明らかに、意味上の単位体つまり現代の用語を用いれば形態素として認識していたことの反映と思われる。そしてこれらは、音声言語の反映とも言うべき性質のものであったかもしれない。

DPの組合わせは、語中改行をしない用例に51例、語中改行を行う用例に26例が例証される。後者の内、P以降を次行送りにするのは僅か2例に過ぎず、他は全てL内部（13例）またはLの直後即ちDの直前の改行（11例）である⁽¹⁷⁾。つまり、これまで明らかになった原則に従う用例ばかりである。Pは音声言語として自立性が弱いため、それを反映した表記の上でも、MPの結合の場合と同様、DPの結合が分離表記されにくい。ただしDPの場合は、Dの性格上、MPの場合と違って音声言語の裏付けはなく、綴字の約束事である。音声言語でPがDを越えて直接Lと結合することは、上の数値にも現れている。この音声上の支えの有無は、上述のDMに見られた不安定な改行原則をも説明する。Dには音声上の裏付けがないため、DMを結合すべきか分離すべきか書記は迷っているのである。そしてそのことが、原則としてよりも傾向性としてしか指摘できない結果を生じていると思われる。

Pに焦点を当てるとどうか。語末Pを行内に書収める用例が最少に見積もっても103例、語末にPを有する語中改行の41例と合わせた両者の合計が144例ある中で、MPやDPの結合形式とは逆に、Pのみを次行に先送りする用例は僅か3例に過ぎない（18,15/16 : pr ! f ; 18,19/20 : w D 3 !!! k w j ; 21,12/13 : x r ! t w）。このように、圧倒的多数の用例においてPを行内に書き収めるのであるから、改行直後のPの出現は、例外的現象とすべきである。

3人称単数男性形接尾辞fの場合は、1字で表記できるので、余白の大小はそれ程問題でないと言えなくもないが、実際の字形は横長で、それ相応の余地

を要求する大きさである。LP・MP・DPを一単位体とする認識が改行を妨げたとしても考えないことには、敢えてfを次行に先送りしない理由がかえって理解し難いものとなる。語末の1字のみが次行に送られる用例は全部で17例あるけれども、その内14例は語末のDが関与している⁽¹⁸⁾ので、むしろDの項で述べたDの次行送りの原則の一証とすべき性質のものである。残る3例⁽¹⁵⁾については、確かにその原則では説明しにくいとは言え、上述の原則の反証とするには用例数が相対的に少いため、より強力な原則を引出すことができない。これらが説明できない限りは、例えば、語末の1字がDでなければ行内に収めるという原則を引出すこともできない。

2字で表記されるtwの場合、問題の用例1例を除く他の32例は全てtvと表記され、その内の行末にかけて現れる唯一の例(7,13:jmj.tw)も、『医学文書辞典』の解釈ではj m j. t w !-n j とな⁽¹⁹⁾って語中改行の例には違いないが、例外と言う訳ではない。

3字で表記されるkwjの場合、次欄に先送りする用例が本パピルスの唯一の出現例であるため俄には断言できないけれども、3字分の余白が必要であることから、行内に収めるには無理があったとも考えられる。たとえ書記が行末を揃えることに無頓着であったとしても、極端な出入りは避けた筈である。上述pr.fの場合は、かなり横に長いfを書加えると行末に極端な凹凸を生じることになり、wD3.kwjの場合は、既に行全体が長く伸びきった状態にあったことが、例外的表記を避けえなかった理由として考えられないだろうか。たとえそのような外的事情があったにしても、語末の1字を次行に送る[mj]!j等の表記例と考え合わせると、kwj内で改行しなかったことは、言語単位の意識の現れという観点からは重視すべき事実と思われる。何れにしろ、例外の2例は第18欄の「呪文」の部分に例証されるので、文書のジャンルによる綴字法の違いを反映している可能性も考えられない訳ではない。と言うのは、他にも「症例」と「呪文」では綴字法が異なっていたと思われる節があるからである。

例えば重字について言えば、「症例」の[sSm][sSm] v y (=sSm.wj: 5, 11; 5, 12; 5, 19) に対し、「呪文」には{swj} v v (=swj: 18, 13; 18, 19) という表記が見られる。即ち、「症例」では[T32]の音価に関係なく重字自体がwjを表すのに対し(つまりvyは重複表記)、「呪文」では重

字自体は wj ではなく、j を表す（だから wwj とならない）。その違いが、同じく wj という音形を持ちながら v の表記の違いとなって現れたと考えられる。因みに、「処方」には二つの綴字法が混在する。重字で j を表記する z p p [zp] {Y01} (=spj: 21, 12) や [Sw] v v {N05} (=Swj: 21, 11; 21, 18; 22, 1) と、j の略記である [Sw] v {N05} (=Swj: 21, 10; 21, 18; 22, 1; 10, 2「症例」にも) を比較。「処方」はまた21, 9以下で書体も代わっている。したがって、「処方」は別として、少なくとも「症例」と「呪文」では綴字法が異なる原則に従っていることは認められるであろう。

II. 作業仮説とその検証（例外の考察）

以上の考察結果は、次のようにまとめることができる。即ち、綴字法で改行が避けられた位置を、制約が強い順に＝－で示すと：L D＝D－M＝P となる。つまり D＝D と M＝P の結合度が最も強く、D－M の結合度は緩やかである。M を欠く場合は、L D＝D－P の傾向が強い。M＝P の結合の強さ、換言すれば P の自立性の弱さは、当時の文法理論から導かれた結論とするよりも、言語現象として現れた結果（例えば、強勢の強弱や有無）を反映すると考えるのが、妥当なところであろう。DM と DP の結合では、D に音声言語の支えのないことが、改行処理に一貫性を欠く原因と思われる。一方、D＝D の結合の強さは、限定符と表音文字との違いを意識していたことの反映と考えられる。そのことは、限定符が自由に交替する同一語の異表記から判断しても、充分有り得たことである。⁽²⁰⁾

この作業仮説を、『難破した水夫の物語』（以下 S S と略記）・『生活に疲れた者と魂との対話』（以下 B A）・『雄弁な農夫の物語』（以下 E P）の三文献に現れる語中改行の用例によって検証する。⁽²¹⁾

1 S S の例外

語中改行の用例23例中、仮定された分綴法を破る用例が2例ある。即ち、人称接尾辞 kwj が途中で切れる用例が1例（42/43, z [Dr] r {A54}. k ! w {j}), 改行直後の人称接尾辞の用例が1例（70/71, w d f {G37} {D54} ! k) である。wdf.k の場合、DD を分割できないので余白の制約から3字分を一括して次行送りにできなかったのであれば、その事情は理解できるが、P を前行内に収めきれなかった理由は分からない。kwj に関しては、BA 127/128に

も同様の例があるが、ここの例は説明がつかない。⁽²²⁾この形式を有する全18例中（1例は復元）、行末に現れて行内に書収められた用例が4例、語中改行が4例あり、その中に上述の1例が含まれている。他の3例では kwj は分割表記されない。残念ながら、神官書体本文が入手できず、これ以上考察を進めることができない。

2 BAの例外

17/18 {b3} {Z06} ! {j} : 本稿の主張を否定する用例。直前の数行と長さを比較しても、Pを次行送りしなければならない明確な理由は見当たらない。

64/65 {[Hr] r [Hry] - {t3} {N23} {Z01}} ! {A01} : 表語文字 {t3} と D = {N23} の後に縦線 = {Z01} と {A01} というDが連続して現れると考えるなら例外となるが、複合語に対する D = {A01} のみが次行送りされていると解釈するなら、例外ではない。

69/70 S [mw] {U09} {Z02} ! f : 17/18 の b3.j と同じく、Pのみが次行送りになっている。

127/128 3 t p {A09} {D36}. k ! w {j} : Pである kwj のこのような切り方は、SS42/43 にも見られる。wもjもかなり大きい文字であり、行内に収めたとしたら、127行目だけがかなり間延びした印象を与えたと思われる。つまり、それが例外を生じた理由と考えられるのであるが、kをwjと一緒に次行送りにしなかったこと⁽²²⁾の説明はできない。

128/129 {[cq] q {D54} - {jb} {Z01}} ! {A01} : 64/65 の Hrj-t3 と同種。

BAは縦書き文書で、行頭には出だしを揃えるための罫線が引かれている。行末には殆んど罫線がなく不揃いである。一部行末に罫線らしきものが見えるけれども、事実そうなのかどうかは写真では確認できない。罫線内に収まる行も実際は殆んどない。写真からはパピルスの繊維が罫線の役目を果たした可能性も窺われる。全155行の本文中に、語中改行は29例ある。Pを持つ形式が10例見られる中で、明らかな例外として指摘できる用例は3例、その内2例は改行直後にPを表記する例、1例はPの kwj を分断する表記である。3例とも改行（直）前にDがある。SSの場合も、例外形はこの二つの型に限られた。つまり、SSとBAは同じ分綴法に従う文献であるとも考えられる。

3 EP（文献B1）の例外

38/39 [w3] 3 t {N31} t ! n {Z02} : 「わたしたちの道」という訳は、改行

直前の t を w3.t の語尾表記と解釈したものである。⁽²³⁾並行箇所 R9, 2 : {w3.t} t {Z01} や B1, 40 : {w3.t} t {Z01} を参照。この場合、複数 1 人称語尾 n のみを次行送りにしたことになる。複数 2 人称語尾 tn 「あんたらの道」とするのは、「天下の公道」を主張する前後関係から不適である。この t はやや大きく書かれているので、r ともし得る。その場合は、r.n 「わしらに（道を塞いでいる）」ということになろうか。何れにしろ、これが P に関する例外であることに変わりはない。ところで、同じ 39 行行末に sw3.n 「わしらを通る」という動詞があり、その 1 人称複数語尾 n は次行行頭に送らず、次行行末に食い込む形で、s [w3] 3 {Z09} {N31}. n {Z02} と書かれ、改行を避けた様子が伺える。となると、P に関する仮説を支える一証と言えるが、同一行内に現れた同一形態素に対する扱いが違う理由はわからない。指摘できるのは語幹の品詞の違いだけである。

131/132 s r f v {D19} ! {A02} : {D19} はかなり横に長く、この段階で既に他の行、特に直前の行末に比べて飛出した状態にある。そのことが改行を余儀なくされた事情であったのかもしれない。また、写真によれば、この字の直後に他と異なる円形に近い欠損が見られる。もしこれが既に書写の時点で存在したとしたら、改行は避けられないものであった。

222/223 s [sSm] m v {D54} {A01} ! s : この縦書き部分の行は、既に全体が長く伸びていて、行末の {A01} は、行末揃えのためか、極度に圧縮した字形を用いている。この上さらに、縦長の文字である s を書加えると、行末が突出し、恐らく美観を損うことになったと思われる。{A01} 同様に s の字を圧縮して行末に続けることは、文字の識別上問題があったのではないだろうか。例えば 338 行末の s を参照。{A01} に並べて書くとう手もあったと思われるが、書記は既に {A01} を行幅一杯に書詰めていた。これも、{D54} {A01} という D の連続を分割しないという規範を意識した結果ではなからうか。

308/309 [wn] n {O31} ! {D36} : この行を含む 4 行は、行末がほぼ一直線に揃っているのに、横長の文字である {D36} を行内に収めようとすると、突出してしまう。行末はかなり意識的に揃えられた形跡がある。しかし、同欄 6 行目 (310) では行末が極端に飛出することも敢えて避けてはいないことから、行末揃えにどの程度の拘束力があったのか疑問である。ところで、その 6 行目不揃いの原因となった S3mw.j は 3 字続きの D に P が接辞する表記であり、本稿

の主張を支持する用例である。

339/340 q r s. t {T19} ! {A24}. f. : 行末を特に揃えたためとも思えない、DDを分割する強力な例外。

以上、2字以上連続するDが分割表記された例外が3例、Pのみが次行に送られた例外が2例、計5例の例外が見られる。したがって、全行数357行からなるB1の本文中に、語中改行の用例が49例、例外はその内5例となる。換言すると、残り44例に関しては例外ではなく、その中で本稿の主張を積極的に支持する用例は、限定符の連続に関しては11例ある。正確に算定するには、さらに行内に書収めた用例も含めた検討が必要かもしれない。文献B2, Bt, Rに関しては、欠損行が多いため単純に比較できないものの、行数はそれぞれ147行、42行、194行ある中で、全て単語境界と行末が一致し、語中改行の用例は皆無である。当然、例外がない。このことから、B2, Bt, Rにおいても、単語が言語単位として明確に認識されていたことは明瞭である。書記は単語としての一体性を強く意識したからこそ、他の文書にはごく一般的にみられる語中改行さえ、避けたとしか考えられ⁽²⁴⁾ない。B1の例外は、5例に過ぎないとも言えるし、用例数としてやや多いとも言える。たとえ多いとするにしろ、上で検討したとおり、個々の事例において例外的表記を余儀なくされた事情もある程度理解されるのである。そして、以上の考察が妥当であるとする、本稿の仮説と真っ向から対立する重大な例外は極めて僅かとなり、誤記の範囲に収めることもできるであろう。

結 び

エジプト語文書は、日本語と同様、分ち書きをしない。しかし、審美的理由による禁則処理を施す以外は字数によって機械的に改行する現代日本語の表記と異なり、改行には何らかの制約があった。ある文書は単語を分断するような改行を認めず、ある文書は特定の形態素や文字連続の分断に制約を加え、他の文書は別の方針をとった。その点で、むしろ、句読点を欠いた過去の日本語の表記を思わせるものがある。文書毎に違いが見られるとは言え、それぞれの文書内では方針は一貫しているように見える。そのことに注意を喚起することができれば、本稿における所期の目的は、ほぼ達成されたと言ってよい。

さらに敷衍すれば、語中改行の諸例にも、古代エジプト人の言語認識の一端

が窺われるとは言えないであろうか。即ち古代エジプトの書記は、単語の認識は言うまでもなく、形態素に対応する文法上の単位体も幾分は認識していた。そのことは、例えば、単語の語彙的意味を担う部分と文法的意味を担う部分である語幹形成形態素や人称接尾辞等の改行の際の扱いの違いに窺われる。また、彼らは限定符が表音文字と異なる範疇であることを、明確に意識していた。そのことは、同一語の異表記だけでなく、改行の際の文字の処理にも明瞭に窺える。限定符と表音文字との区別は近代の分析的な知性を有するエジプト学者の考案に過ぎず古代エジプトの書記にそのような現代言語学の概念があった筈がない、とは断言できまい。このような認識が、抽象的文法理論に基づかなくとも具体的な言語使用の過程から充分生まれ得たことは、考えられることである。まさに、『文字の創始者はある意味では言語学者であった。それは、文字を始めて創り出した人は必ずその言語を反省したにちがいないからである。……つまり、文字で表語することによって「語」が出来た⁽²⁵⁾』のである。

注

- (1) J.H. Breasted, *The Edwin Smith Surgical Papyrus*, 2 vols., Chicago, 1929.
- (2) Sir A.Gardiner, *Egyptian Grammar*³, Oxford, 1957, p.438 以下。ここで用いた翻字法は、機械処理を考慮した以下の文献を参考にし、さらにパソコンでも処理可能のように手を加え、表音文字と表語文字・限定符は [ ] と { } で区別し、改行と改欄は ! と !!! で表記した。J. Buurman *et al.*, *Inventaire des signes hiéroglyphiques en vue de leur saisie informatique*, Paris, 1988 は、文字の微細な相違だけでなく、文字の位置関係さえも反映できる聖刻書体用のコード体系であるが、それらは本稿の目的にとって過剰な情報と判断し、入力 of 便宜も考慮して、より簡略化した翻字法を用いた。W.Schenkel, *Aus der Arbeit an einer Konkordanz zu den altägyptischen Sargtexten*, Teil I: *Zur Transkription des Hieroglyphisch-Ägyptischen* (unter Mitarbeit von R. Hanning), *Göttinger Orient forschungen* IV, 12, Wiesbaden, 1983 は、上とはまた異なるコード体系で改変記号の多用と活字ポイントの使い分けがあるため、パソコン次第では利用しにくい翻字法である。
- (3) 出現箇所は以下のとおり：1, 24 ; 5, 9 ; 5, 20 ; 7, 5 ; 7, 18 ; 7, 22 ; 8, 22 ; 10, 3 ; 11, 14 ; 11, 15 ; 12, 1 ; 12, 14 ; 13, 15 ; 13, 17 ; 15, 10 ; 16, 12 ; 17, 2 ; 18, 9 ; 19, 8 ; 20, 6 ; 21, 5 ; 21, 15 ; 21, 21。用例は wc(.t)「一つの」が 5 例、Hr「の上」が 4 例等であるが、それぞれののべ語数が順に 19 例と約 100 例であることを考えると、wc(.t) の場合、頻度の割には行末の用例が多いという印象が残る。
- (4) 例えば、複合語全体に掛かる限定符に関してガーディナー、上掲書, p.52 を見よ。

また、限定符が単語境界を表示する機能を持つことについては、A.H.Gardiner, *The Theory of Speech and Language*², Oxford, 1951, p.122 を参照。

- (5) 1, 1 ; 1, 6 ; 1, 15 ; 1, 17 ; 1, 23 ; 2, 2 ; 2, 7 ; 2, 11 ; 2, 19 ; 2, 22 ; 3, 2 ; 3, 4 ; 3, 8 ; 3, 9 ; 3, 13 等。語中改行の全用例と、語末が行末と重なる全用例は、紙幅の都合で列挙できない。
- (6) ガーディナー、上掲書、p.235。3, 3/4 に、人称代名詞の後に限定符を持つ j ! S. f {A02} の例さえあるが、本文書では極めて異例である。しかし、W. Westendorf, *Grammatik der medizinischen Texte, (Grundriß der Medizin der Alten Ägypter VIII)*, Berlin, 1962, S.8 によれば、医学文書には散見されるようである。
- (7) M.Megally, *Considérations sur les variations et la transformations des formes hiératiques du Papyrus E.3226 du Louvre, Bibliothèque d'étude* 49, Le Caire, 1972, p.37 は、連字の発生要因を幾つか掲げている。本稿との関連では、語中や語末よりも語頭の方が略記が起こりにくいとか、Dの連続が連字を生じ易いという指摘は興味深い。けれども、連字が少ないスミス・パピルスの状況から判断すると、連字の存在が改行の原則に影響を与えたと言うよりも、改行の原則を支配したと同じ、言語単位に対する書記の意識が、連字発生の真因であったと筆者は考える。ムガリの指摘で最も興味深いのは、頻度即ち彼の言う言語上の要因が連字発生に影響したというものであるが、これも、上述の理由から、本パピルスでは直接の影響を云々することはできない。
- (8) 語頭より数えて、2字目以降：2, 23/24 ; 3, 3/4 ; 3, 19/20 ; 4, 15/16 ; 5, 11/12等 ; 3字目以降：2, 24/25 ; 6, 15/16 ; 7, 14/15 ; 9, 20/21 ; 10, 4/5等 ; 4字目以降：4, 5/6 ; 4, 12/13 ; 5, 12/13 ; 5, 21/22 ; 6, 4/5等 ; 5字目以降：3, 12/13 ; 4, 10/11 ; 6, 1/2 ; 8, 10/11 ; 14, 20/21等 ; 語末より数えて1字のみ：5, 21/22 ; 6, 1/2 ; 13, 12/13等 17例 ; 語末2字：6, 13/14 ; 7, 7/8 ; 8, 10/11等 29例 ; 語末3字：2, 4/5 ; 4, 5/6 ; 4, 10/11等 27例 ; 語末4字：6, 4/5 ; 6, 11/12 ; 7, 21/22等 24例。語末5字以降 12例。
- (9) 表語文字を含む文字論の用語と理論については、河野六郎「文字の本質」、『河野六郎著作集3』平凡社、1977年、107頁以下を参照。エジプト文字の場合、表語文字自体ではなく、振り仮名・送り仮名相当部が分割される。共時論的には、振り仮名付きの表語文字と限定符を伴う表音表記との俊別はできない。本稿では、問題の1字を省いても音形が確定できる場合、それを限定符とした。
- (10) 5, 12/13 ; 5, 17/18 ; 6, 16/17 ; 12, 4/5 ; 12, 12/13 ; 17, 18/19 ; 18, 15/16 ; 18, 19/20 ; 20, 18/21, 1 ; 21, 18/19。
- (11) 1, 26/2, 1 ; 2, 3/4 ; 2, 17/18 ; 2, 18/19 ; 2, 24/25 ; 3, 12/13 ; 4, 14/15 ; 5, 14/15 ; 5, 21/22 ; 6, 1/2 ; 6, 6/7 ; 7, 7/8 ; 7, 11/12 ; 7, 20/21 ; 8, 6/7 ; 8, 8/9 ; 8, 10/11 ; 10, 6/7 ; 11, 10/11 ; 11, 22/23 ; 12, 5/6 ; 13, 6/7 ; 13, 12/13 ; 13, 22/14, 1 ; 14, 9/10 ; 14, 11/12 ; 14, 20/21 ; 15, 6/7 ; 15, 12/13 ; 15, 14/15 ; 15, 18/19 ; 16, 6/7 ; 16, 19/20 ; 18, 13/14 ; 19, 20/20, 1 ; 20, 14/15 ; 21, 6/7。この内、Mを持つ形式は11, 10/11と13, 6/7だけであ

る。

- (12) 5, 12/13 ; 5, 17/18 ; 6, 16/17 ; 12, 4/5 ; 12, 12/13 ; 17, 18/19 ; 21, 18/19 は D と M の間で改行。DM が連続するのは 5, 11/12 ; 6, 11/12 ; 9, 19/20 ; 11, 10/11 ; 13, 6/7 ; 13, 20/21 ; 21, 11/12 の 7 例があるが、内 5 例は L の部分での改行である。ここでは DM ! P (用例なし) または ! DM (11, 10/11 ; 13, 6/7) が該当用例。行内に収まる用例中、語中に DM の連続を持つものは 13 例ある。
- (13) 1, 26/2, 1 ; 2, 17/18 ; 2, 24/25 ; 3, 10/11 ; 3, 15/16 ; 5, 14/15 ; 6, 7/8 ; 12, 5/6 ; 12, 17/18 ; 13, 22/14, 1 ; 14, 5/6 ; 14, 20/21 ; 14, 22/23 ; 14, 23/15, 1 ; 15, 6/7 ; 15, 11/12 ; 15, 18/19 ; 18, 13/14 ; 19, 20/20, 1 ; 20, 8/9 ; 20, 14/15 ; 20, 18/21, 1 ; 21, 6/7 ; 21, 9/10 ; 21, 11/12 ; 22, 6/7 ; 22, 8/9。
- (14) 語中改行 : 2, 4/5 ; 4, 5/6 ; 5, 11/12 ; 5, 12/13 ; 5, 17/18 ; 6, 11/12 ; 6, 16/17 ; 9, 19/20 ; 10, 10/11 ; 11, 10/11 ; 12, 4/5 ; 12, 12/13 ; 13, 6/7 ; 13, 20/21 ; 17, 18/19 ; 20, 18/21, 1 ; 21, 11/12 ; 21, 18/19。行内 : 3, 4 ; 3, 7 ; 3, 9 ; 3, 13 ; 6, 9 ; 7, 9 ; 8, 12 ; 10, 16 ; 11, 5 ; 11, 19 ; 12, 13 ; 14, 19 ; 21, 1。
- (15) 15, 17/18 ; 16, 15/16 ; 18, 15/16 と (18) の言及箇所。
- (16) 21, 11/12 : [x3] 3! [x3] 3 {P05} {D54} x r t v=x3x3.xr.tw は L の部分での改行。
- (17) P のみ次行送り : 18, 15/16 ; 18, 19/20。L 内での改行 : 3, 3/4 ; 3, 10/11 ; 3, 18/19 ; 6, 4/5 ; 7, 21/22 ; 9, 20/21 ; 10, 4/5 ; 11, 7/8 ; 13, 14/15 ; 13, 18/19 ; 15, 7/8 ; 16, 2/3 ; 17, 13/14。改行直後の D : 2, 24/25 ; 3, 12/13 ; 4, 14/15 ; 5, 14/15 ; 7, 7/8 ; 8, 10/11 ; 10, 6/7 ; 11, 22/23 ; 12, 5/6 ; 15, 14/15 ; 16, 19/20。
- (18) 2, 3/4 ; 2, 18/19 ; 5, 21/22 ; 6, 1/2 ; 6, 6/7 ; 7, 11/12 ; 7, 20/21 ; 8, 6/7 ; 8, 8/9 ; 13, 12/13 ; 14, 9/10 ; 14, 11/12 ; 15, 12/13 ; 16, 6/7。
- (19) H. von Deines und W. Westendorf, *Wörterbuch der medizinischen Texte*, 2 Bde (*Grundriß der Medizin der Alten Ägypter*, VII 1-2), Berlin, 1961。
- (20) 例えば, wbnw では {D26} と {F51} が (2, 3 と 3. 2 ; 3, 9 と 3. 9 他多数), ch3 では {A24} と {D36} と {D40} が (2, 11 ; 3, 6 ; 8, 9 等全 9 例) 自由に交代し, Sbb では {F51} に {F10} を加える (9, 22 と 9, 19) 等, 用例は数多い。
- (21) ここでも、紙幅の制約で、直接関連する箇所しか掲げられない。本文は以下を参照した。A. M. Blackman, *Middle-Egyptian Stories*, (*Bibliotheca Aegyptiaca* II), Bruxelles, 1972 ; W. Barta, *Das Gespräch eines Mannes mit seinem BA*, *Münchener Ägyptologische Studien* 18, Berlin, 1969 ; R. B. Parkinson, *The Tale of The Eloquent Peasant*, Oxford, 1991 ; F. Vogelsang und A. H. Gardiner, *Die Klagen des Bauern*, (*Hieratische Papyrus aus den Königlichen Museen zu Berlin* IV), Leipzig, 1908。詳細な文献紹介と邦訳が屋形禎亮『筑摩世界文学大系 1 古代オリエント集』筑摩書房, 1978 年, 401 頁以下にある。
- (22) ガーディナー, 上掲『エジプト語文法』p. 235 には, kwj の w や wj を省略し

た形が『シヌヘ物語』とSSから挙げられている。何れも行半ばに現れる。この用例と共に、既に音形上の支えを失っていた可能性が考えられる。J. Černý & S. I. Groll, *A Late Egyptian Grammar*, Rome, 1975, p. 195, 2. a. も参照。

(23) ガーディナー、上掲書、p. 53 も同解釈。改行規則を破る用例が綴字もまた変則的であることは単なる偶然であろうか。

(24) スミス・パピルスにも語末が行末と重なる用例が約 350 例あったことは既に述べた。

(25) 河野、上掲書、125 頁。単語認識に高度の言語理論は不要、とする E. Sapir, *Language*, London, 1921, p.34 も参照のこと。ガーディナー（上掲『理論』、同頁）もこれに従うが、限定符と文法語尾の位置は、スミス・パピルスでは彼が指摘する程不安定ではない。サピアは、音韻特徴が単語認定に影響を与えるのではなく、単語の心理的実在が音韻面に顕現するのだと言う（上掲書、p. 35）。何れにしろ、単語認識に直接影響する文字使用という観点はない。ライオンズ（J. Lyons, *Introduction to Theoretical Linguistics*, 1968, 特に p. 199）も、文字表記が単語認知力を高めることではないと言う。けれども、表記しなければ単語という単位体も意識されぬままであったに違いない。また、単語がそれ程明確に認識されるものなら、そのような単位体を分断する語中改行には、かなりの抵抗があったと思われる。分ち書きをする言語においては、単語の認識は表記に如実に現れる。だからこそ、書き手の直感の首尾のなさ、と言うより言語自体の性質（河野、同書、同頁）を反映して表記に一貫性がない。分ち書きをしないエジプト文字においては、単語認識を明示する手段も、したがってその有無を判断する材料も限られる。現代のエジプト学者と同様、古代エジプトの書記にとっても事情は異ならなかったであろう。そのような状況の下で、彼らに単語という単位体を鮮明に意識させる役割を果たしたのが、文字、とりわけ限定符だったと言えるのではないだろうか。

(1993. 10. 15)